

# 相談場面における「独話的発話」の類型

## —発話連鎖と「文型」の関係をめぐって—

立見洗貴(名古屋大学大学院生)

### 1. はじめに： 問題の所在

私たちが誰かと対面して相談などのやりとりを行う場合、多くの発話が相手(すなわち、聞き手)の存在を意識したものになるだろうが、すべての発話が必ずしも聞き手に宛てられたものであるとはいえない。私たちは、時に、聞き手が目の前にいるにもかかわらず、独り言を言うかのように自身の「感情」を表出したり、「思案」を吐露したりしている。こうした発話を、本研究では「独話的発話」(三牧, 2000)と呼び、分析と考察を行う。

特に近年、スマートフォンの普及は国内外ともに著しい。スマートフォンをはじめとする電子機器の普及は、私たちの言語生活の在り方にも変化を与えてきた。例えば、相談場面においては、何かを決めるという過程において、「今、まさに」相談を行っている最中にスマートフォンなどを用いて物事を決定するために必要な情報を収集しながら、口頭でのやりとりを行うといったコミュニケーションのやり方が一般的になってきた。このような場面においては、スマートフォンを用いた情報収集と、対面する相手との言語的なやりとりを、同時並行的に、リアルタイムで進めていく必要があるといえるが、独話的発話が、参加者がスマートフォンを操作していたことによる、完全な沈黙の状態を回避させるべく、情報収集と言語によるやりとりの両立の一端を担っていると考えられる。

そこで、本発表では、スマートフォンが使用可能な状況で行われた相談(「誕生日会の計画」)の談話を分析データとして、独話的発話と、これを契機とする発話の連鎖に注目し、①独話的発話が「文型(=林モデル)」(林, 1960[2013復刊])の中でどのように位置づけられるか、②独話的発話を契機とする発話の連鎖が構築される時、その発話が、形式的・意味的にどのような特徴を有しているか、③独話的発話の種類ごとの、産出の動機づけがどのようなものであるかについて、分析と考察を行った。

### 2. 先行研究

従来の研究において、会話中での「独話的発話」については、平本(2011)によって、ある種の独話的発話による「話題アイテムの掘み出し」という現象が指摘され、その後、岡崎(2020)によって、その「掘み出し」が多様なタイプの独話的発話により可能であることが示されている。また、筒井(2012)、呉(2019)は、独話的発話から始まる連鎖組織について分析を行い、思考・感覚系の連鎖組織(より具体的には、話者の感情・感覚などを表出する連鎖組織と、話者が抱えている問題について思案する連鎖組織)がみられたと指摘している。しかし、これらの研究において、「掘み出し」をはじめとした、やりとりの中に取り込まれていく独話的発話が、形式的・意味的にどのような特徴を有しているかについては言及されておらず、また、産出の動機づけを論じている研究は、管見の及ぶ限りでは見当たらなかった。

### 3. 調査概要と分析方法

本研究の分析データは、親しい間柄の20代の日本語母語話者2名による、スマートフォンが使用可能な状況で行われた相談の談話(「誕生日会の計画」)である。分析方法については、まず、文字化データから分析対象とする発話を抽出した。本研究における独話的発話は、平本(2011)、呉(2019)、岡崎(2020)を参考にして、「聞き手不在であるかのように呟かれるように発話され、思考や心情などが率直に表出された発話」と定義した。次に、分析対象として抽出した発話を、林(1960)の中で「結び文型」として挙げられている「描叙段階」「判断段階」「表出段階」「伝達段階」の4つに分類を行った。分類にあたっては、まずは、林(1960)に列挙されている言語形式を優先して分類を行い、同一の形式が複数の段階に記述されている場合は、意味に基づいて分類を行った。また、1発話中に独話的発話が複数含まれている場合は、それぞれについて分類し、1発話中に複数の段階の形式が共起している場合は、より文末に近い位置で用いられている形式を分類の基準とした。その後、本研究の3つのRQ(上述の①～③)に沿って、各事例の分析を行った。

## 4. 分析と考察

### 4.1 「文型 (=林モデル)」の観点からみた「独話的発話」の位置づけ

表 1. 林モデルにおける独話的発話の位置づけ

文型	段階	意味 等	実例数	応答あり	
結び文型 (55)	描叙段階 (10)	体言による描叙①	5	1	
		体言による描叙②	5	0	
		用言による描叙			
	判断段階 (19)	単純な形の肯定			
		いろいろな形の肯定	2	1	
		否定			
		可能			
		過去			
		推量	1	0	
		疑問	15	5	
	表出段階 (19)	感動	17	8	
		期待			
		懸念			
		意志	2	1	
	伝達段階 (7)	単純な伝達			
		押しつけふう	2	2	
		勧誘ふう			
		命令ふう	2	1	
		質問	3	3	

的発話全体のうちの約7割を占め、「判断」および「表出」機能が独話的発話の中核をなすことが明らかになった。

また、「描叙段階」に分類したような、体言1個による独話的発話も10例確認できた。「体言による描叙①」は、会話の流れを受けて独り言を言うように発せられるものである。本発表では「描叙」として分類したが、文として発話されること自体、話し手による何らかの事態の認識があったことを意味しており、その意味で、発話には何らかの「判断」や「表出」が伴っていると考えられる。一方、「体言による描叙②」は、スマートフォン使用時に並行して現れる、スマートフォンの操作をそのまま言語化するようなものであり、話し手自身の何らかの感情を「表出」しているとは考えにくい。

#### 【会話例 1】

86	75	*	JN01	=なんか、私一(確かにね)、なんか、多分やってもらったとき自分で(うんうん)、お金出し、てて、普通に、疑ってなかった(笑)ながら(笑)からさー。
87	76	*	JN02	(笑)そっかー、よりサプライズ感を、ちゃんと成功させるため(うんうん)には、じゃあ予算は最初いくらだみたいな(うんうん)、いくらのコースにします(うんうん)とかの方がいいかもね。
88	77	*	JN02	じゃあやっぱりー、そのケーキとー、ちっちゃいプレゼント[プレゼントという語を際立たせて]、みたいなのでー[↓]、に、しよっか[ささやくように]。
89	78	*	JN01	=うん。
90	79	*	JN02	《少し間》お店決めなきゃー。
91	80	*	JN01	そうだー[↓](笑)。

ではなく、「どこで誕生日会を実施するか」をまず決める必要があると、90行目でJN02が「お店決めなきゃー」という独話的発話を発している。この発話に含まれる「なければならない」という文型は、林(1960)では、「伝達段階」の「命令ふうの伝達(義務)」に分類されている。しかし、この発話は、視線が聞き手から外され、呟くように発話されており、独話的発話の性格を有している。また、「なければならない」は、自分自身の義務に対しても使用することができるように(ここでは、2人で課題達成を目指すべき課題に対して用いられている。)、この例は、「命令ふうの伝達(義務)」を行っているのではなく、むしろ「表出段階」の「意志」に接近した用法であると考えられる。このように、「伝達段階」の独話的発話では、言語形式上は「伝達」であるものの、必ずしも聞き手に対して「伝達」をしているとはいえず、いわば「伝達」の装いをしながら話し手自身の「判断」あるいは「表出」を述べていると考えられる。

### 4.2 後続文脈に発話連鎖を構築しうる「独話的発話」の形式的・意味的特徴

表1において、ある独話的発話が、その発話を契機としてその後の相互行為の中に取り込まれていたもの、つまり、話し手が、聞き手の存在を意識せずに独話的発話を呟いた結果、それが相互行為の中に取り込まれ、その後の話題として展開していたものを、「応答あり」として示した。例えば、「体言による描叙①」では、全55例中1例において、独話的発話を契機とする発話の連鎖が後続文脈において観察されたということである。まず、全体的な傾向として、全55例の独話的発話のうち、「応答あり」の独話的発話が23例抽出できたが、その中でも、「判断段階」の「疑問」に該当する例が5

本研究の分析データから、合計55例の独話的発話を抽出し、「林モデル」に基づいて分類を行った(表1)。なお、「描叙段階」に含まれる一語文については、さらに2つに下位分類を行った。一つは、会話の流れを受けて独り言を言うように発せられるものであり、もう一つは、スマートフォン使用時に並行して現れ、自身のスマートフォンの操作をそのまま言語化したようなもの(スマートフォン操作という非言語行動が第一義的になっているようなもの)である。

分類の結果は、「描叙段階」10例、「判断段階」19例、「表出段階」19例、「伝達段階」7例であり、4段階すべてに該当する実例が確認できた。特に、合計55例のうち、「判断段階」と「表出段階」に属するものがそれぞれ約34.5%あり、これらだけで独話

一方、「伝達段階」に属する例も7例観察できた。会話例1では、「誕生日会の主役であるCからも会費を徴収すべきか」という話題について話し合われる中で、サプライズでの誕生日会を成功させるためには、あらかじめ会費を伝え、普通の食事会であることを装った方がよいと意見がまとまったところで、少し間を置いて、「どのように誕生日会を実施するか」

例、「表出段階」の「感動」に該当する例が8例と、多いことが分かる。この結果は、呉(2019)と並行的な面を有している。呉(2019)と本研究とは独話的発話の分析範囲が異なるものの、呉(2019)がいう、「思案」の連鎖組織は、本研究の「疑問(判断段階)」と親和性が高く、また、「感情」「感覚」の連鎖組織は、「感動(表出段階)」に対応する。さらに、呉(2019)は、「感情」「感覚」などの「感覚系」の使用頻度が、「思案」の表出に関する「思考系」よりも多く現れることを指摘しているが、その傾向は本研究においても同様であった。

そして、「描叙段階」や「判断段階」に属する独話的発話よりも、「表出段階」や「伝達段階」に属する独話的発話の方が、当該の独話的発話を契機とするやりとりが展開されやすいという傾向がみられた。特に、「描叙段階」のうち、スマートフォン操作の言語化に関する独話的発話(「体言による描叙②」)に対して応答がきていた例は1例もみられず、反対に、「表出段階」では全19例中9例において、「伝達段階」では全7例中6例において、聞き手からの応答がみられた。さらに、「判断段階」における「応答あり」の例をみると、「あーアヒージョ美味しそう」のような、話し手の評価を「感動」として「表出」する性質をもったものや、「(名古屋の飲食店を検索したつもりだったのに、見つかった店が)新宿だった」と、自身の軽度の失敗を「表出」し、どこかで相手に笑ってもらいたいという思いが垣間見えるような例であった。

平本(2011)によって、独話的発話による「掴み出し」という言語現象が指摘され、その後、岡崎(2020)によって、その「掴み出し」が多様なタイプの独話的発話により可能であることが示されたが、本研究を通じて、「掴み出し」が可能になるのは、「表出段階」あるいは「伝達段階」に属する独話的発話である場合が多いという傾向が明らかになった。

### 4.3 相談場面における「独話的発話」の種類ごとの産出の動機づけ

そして、情報収集のためのスマートフォン使用が可能な相談場面において、独話的発話が発せられる動機づけがどのようなものであるかということについて考察を行った。独話的発話は、原則的に、聞き手から視線を外し、咳かれるように発せられるもの(三牧, 2000; 平本, 2011)であり、すなわち、聞き手不在であるかのように発話がデザインされている。本発表でも、すべての独話的発話に共通する性質として、「対面する相手(=聞き手)とのやりとりからは、(継続的であれ、瞬間的であれ)一時的に離脱している状態」であると考えられる。その上で、独話的発話を、(1)スマートフォン操作を言語化した独話的発話、(2)「課題非達成型」の独話的発話、(3)「課題達成型」の独話的発話という3種類に下位分類し、それぞれについて、産出の動機づけを考察し、それぞれの独話的発話の機能について論じる。

#### 【会話例2】

162	147	*	JN02	《少し間》なんて調べればわかるかな？
163	148	*	JN02	《少し間》“スペイン料理”、“名古屋”、“誕生日”… [「日」の音はほとんど聞こえない]。
164	149	*	JN01	《沈黙8秒》[2人ともスマートフォンで調べている]名駅[独り言を言うように]。

まず、(1)の例として、会話例2を挙げる。会話例2では、163行目でJN02は、“スペイン料理”、“名古屋”、“誕生日”…と咳きながらスマートフォンの操作(検索

ワードの入力)をしている。スマートフォンを操作することによって対面する相手とのやりとりが一時的に滞ってしまうことになるが、スマートフォン操作を言語化するような独話的発話は、このときに沈黙を作らないための戦略として、意識的あるいは無意識的に、発せられていると考えられる。さらに、この類の独話的発話を発することによって、話し手は、課題達成に向けた行為(すなわち、スマートフォンによる情報収集)を行っていることを、間接的に、聞き手に示唆することができる。対面する相手と相談などのタスクを有するやりとりを行っている最中に、スマートフォンを取り出し、何かを行うということは、ある意味では、本筋(すなわち、タスクに志向したやりとり)からは離脱していることになり、その参加者は、他の参加者から完全に独立した状態となる。つまりは、参加者は、例えば、仕事のメールに返信したり、SNSをチェックしたりという相談の課題達成とは関係のないことも、物理的には行うことが可能な状況になっている。そのような状況において163行目のように発話することで、聞き手は、独話的発話の話し手が(他事をやっているのではなく)課題達成のための情報収集を行っているということが理解可能になる。したがって、(1)は、相談場面に特徴的な独話的発話であり、両者がスマートフォンを操作することによって生じる沈黙の状態を回避し、話し手が課題達成に向けた行為を行っていることを聞き手に暗示するための戦略として機能している。

#### 【会話例3】

188	173	*	JN02	なんかちよっ[スマートフォンを机の上に置き、画面をJN01と共有する]。
189	174	*	JN01	《沈黙2秒》あーアヒージョ美味しそう。
190	175	*	JN02	ねー[高いトーンで]。

次に、(2)の例として、会話例3を挙げる。会話例3では、189行目でJN01は、JN02が共有したスマートフォンの画面を一緒に見ながら、「あーアヒージョ美味し

そう」と咳いているが、この類の独話的発話では、話し手の志向が、本筋である議論の進行ではなく、「雑談性」に向いていると考えられる。つまり、189行目の話し手にとっても、この発話が、課題達成のために直接的に貢献するものでないことが明らかであったために、独話的発話として発話がデザインされていると考えられる。もしこの発話が、聞き手目当

ての言語形式（例えば「だね」）を伴って発せられていた場合、聞き手である JN02 は、その発話に対して何らかの反応を示すことが適切となる。しかし、聞き手目当てでない独話的発話であれば、この発話を拾ってやりとりを展開させるかどうか（すなわち、「雑談性」のやりとりを許容するかどうか）は、聞き手に委ねられる。そして、こうした発話がある方が、相談の言語活動が参与者にとって生き生きとしたものになり、相手に対する「親しさ」を示しながら、円滑に相談を進めることができると考えられる。さらに、「アヒージョ美味しそう」という話し手自身の「感情」を表出する独話的発話は、間接的には、直前のやりとりに対して〈好ましい〉、〈肯定的な〉評価を行っているともいえるため、こうした評価をきっかけとして誕生日会を行う飲食店が決定できるなど、課題達成に間接的に貢献する可能性もある。したがって、(2)は、親しいという参与者間の親疎関係が強く反映されたものであり、課題達成に志向しないこの発話を、あえて聞き手目当てにしない言い方にすることで、これを拾って話題を展開させるかどうかを聞き手に委ねるとともに、やりとりに和やかで協調的な雰囲気をもたらす、参与者間で会話そのものを楽しむためのストラテジーとして機能している。

#### 【会話例 4】

118	105	*	JN02	“洋食”、“名古屋” [検索ワードをつぶやきながら]。
119	106	*	JN02	《沈黙 8 秒》 [2 人ともスマートフォンで検索中] 名古屋カレー [↓]。
120	107	*	JN01	《少し間》 スペイン料理か [検索した結果、良さそうなお店をつぶやく]。
121	108	*	JN02	あー [高いトーンで]。
122	109	*	JN02	梅酒ある (笑) かなー、スペイン料理で。
123	110	*	JN02	微妙だけどー (うんうん)、でもお酒好き…、サ、サングリア好きだったよね確か { }。
124	111	*	JN01	〈あ、飲んでた〉 { } 〈飲んでた〉 { }。

そして、(3)の例として、会話例 4 を挙げる。会話例 4 では、120 行目で JN01 が「スペイン料理か」と、検索した結果、良さそうな飲食店のジャンルを呟き、この独話的発話を契機として、話し合いが大きく進展している (JN02 は、JN01 の独話的発話に含まれる「スペイン料理」というキーワードに注目し、これを手がかりとして、

飲食店決定の話し合いをさらに進めようとしている.)。120 行目は、双方がスマートフォンを用いて情報収集を行っている最中に発せられた独話的発話であるが、このとき、例えば、「えっ、ねえ、スペイン料理なんてどう?」のように、聞き手目当ての言語形式を含む言い方で発話することも可能である。そうした場合、聞き手は、この発話に対して何らかの反応を示すことが適切となるわけだが、同時に、たとえ聞き手がイタリアンやタイ料理などの別の良さそうな飲食店やジャンルを発見したところだったとしても、自身のスマートフォン操作の中断を余儀なくされることになる。したがって、双方がスマートフォンを用いて情報収集を行っているときに、突然何の前触れもなく「提案」などの行為を行うことは、FTA の度合いが比較的高い行為であると考えられる。そのような状況において、独話的発話を用いて、話し手自身が良いと思った飲食店のジャンルを呟くなどすることで、スマートフォンの操作を行っている聞き手の領域に過度に踏み込むことなく、間接的なやり方で「控えめな提案」を行うことができると考えられる。以上のことから、(3)は、聞き手に対する FTA の度合いを軽減し、間接的に「控えめな提案」を行うネガティブポライトネス・ストラテジーとして機能している。

## 5. おわりに

以上、本発表では、「独話的発話」を契機とする発話の連鎖に注目し、どのような独話的発話が発せられた場合に、その後のやりとりの中に取り込まれていくかということについて、「文型 (= 林モデル)」（林, 1960）の観点から分析を行い、さらに、独話的発話の産出の動機づけを考察した。本発表を通じて、一見、聞き手の存在が無視されているかのように感じられる独話的発話にも、それぞれ産出の動機づけがあり、相互行為上、重要な働きをしていること、特に、本筋から離脱したところで、間接的に、相談の課題達成という本来の目的を達成するために機能していることを指摘した。

### 参考文献

- 林四郎 (1960). 基本文型の研究 明治図書出版 [2013 ひつじ書房より復刊]  
 平本毅 (2011). 話題アイテムの掘み出し 現代社会学理論研究, 5, 101-119  
 三牧陽子 (2000). 丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして— 多文化社会と留学生交流, 4, 37-53.  
 岡崎渉 (2020). デスマス形会話における独話的発話の談話機能 言語表現研究, 36, 47-60.  
 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析 くろしお出版  
 呉秦芳 (2019). 独り言から始まる連鎖組織の類型化—会話教育の指導項目を考える— ニダバ, 48, 60-69.